

# 新 アジアの風

県立大地域経済研究所報告

メコン経済圏の中で、タイは多くの日系企業が集積し、自動車産業を中心に東南アジア諸国連合(ASEAN)の一大生産基地となった。タイと国境を接しているのがカンボジア、ラオス、ミャンマーの「CLM3カ国」だ。同経済圏は交通インフラ整備が進んでおり、陸路で国境を越え

春日 尚雄教授

前回、ラオスは中国との経済関係を強めていると書いたが、隣国タイとの関係も当然ながら密接である。ラオス語とタイ語は類似しており、特にタイ東北地方とは言語、文化的な共通性が極めて高い。貿易はラオスがタイからさまざまな物品を輸入する一方的な関係だったが、ラオスでの水力資源開発によって電力をタイに輸出するようになり、双方向になりつつある。

これらの国へ旅客や貨物を移動することが容易になってきている。

ASEANの小国・ラオスは今(下)

## 日系企業、タイと分業



ラオス・ビエンチャン郊外の日系縫製企業で、男性用シャツを製造する従業員=8月(筆者撮影)

足、2011年の大洪水の発生などが挙げられる。日系企業は、タイの工場とあると考え、労働集約的な生産などが行われる。サプライチェーンを構築できるとは国境を接する周辺国で

筆者は8月にラオスを訪れ、日系進出企業を視察した。写真の日系縫製業Y社は、年間60万枚の男性用ドレスシャツを生産している。従業員は約350人で、日本人管理者3人が常駐している。今回訪問した日系進出企業に多く見受けられたのは、加工品をラオスからいったんタイに輸出し、製品完成後に最終仕向け地に出荷するという事業形態である。その場合、タイに品質を管理し、物流をコントロールできる拠点があるケースが多い。ラオスの強みとしては、タイ語をラオス人が理解することから日本人管理者ではなく、タイ人スタッフが代わりに務められる可能性が高いことがある。一方、弱みは労働力が少ないことで、ラオスの人口700万人はカンボジアの約半分、ミャンマーの8分の1ほどではない。そのため、層の薄い中間管理者の人材育成に時間がかかり、単純労働については絶対数の点から人手が不足する。こうしたことから大手日系製造業では、本格的なラオス進出を計画することは少ない。ただ「すき間型」「じつくり型」の中小・中堅企業にとっては、進出も検討に値する国といえるかもしれない。

業や工程が切り離される事例が目立つようになった。ラオスも候補地の一つとなり、首都ビエンチャン、サワナケット、南部のパクセーなどに経済特区(SEZ)が建設されている。ラオスの強みとしては、タイ語をラオス人が理解することから日本人管理者ではなく、タイ人スタッフが代わりに務められる可能性が高いことがある。一方、弱みは労働力が少ないことで、ラオスの人口700万人はカンボジアの約半分、ミャンマーの8分の1ほどではない。そのため、層の薄い中間管理者の人材育成に時間がかかり、単純労働については絶対数の点から人手が不足する。こうしたことから大手日系製造業では、本格的なラオス進出を計画することは少ない。ただ「すき間型」「じつくり型」の中小・中堅企業にとっては、進出も検討に値する国といえるかもしれない。